

立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所漢字學研究
第一號拔刷 二〇一三年三月發行

釋叵—藝の異體字—

木
村
秀
海

釋取 — 藝の異體字 —

木村秀海

卜辭中にある𠄎・𠄎という字は読みも意味もまだよくわかっていない。以前、これらの文字については「衆人新解^①」において少しく觸れたことがあるのだが、意を盡くさないところがあつたので、如何に読み、如何なる意味かについて論じたい。

𠄎字の用例は『殷墟甲骨刻辭類纂』には次の一例のみしか掲載されてはいない。

癸子(巳)卜、宀、貞令衆人^𠄎、入𠄎方^𠄎 田《合集》六
この字について彭邦炯は

𠄎字上邊所从者實爲手持筆或刷形、釋者只當此字爲聿、實則還可釋爲「𠄎」。『說文』無單獨的「𠄎」、但草部收有「从草𠄎聲」的「𠄎」字。段注「讀若怪切、卽聿字」

と説明し、「聿」字は聿字の或體としてゐる。^②しかし、それを于省吾はと、「从聿从斧」の字であり、「聿」説は據るべからず、と評している。^③

この字と同類の字に^𠄎という字がある。
占曰、^𠄎其雨、佳……《合集》一三〇二七反

丁亥、貞今秋王令衆^𠄎、作^𠄎《屯南》四三三〇

この字については『小屯南地甲骨 釋文』では^𠄎、疑爲「取」之異構

と云い、「取」の異構としている。^④この字の右旁は隸定すれば𠄎であり、『說文解字』又部に「𠄎、滑也。詩云、𠄎兮達兮。从又𠄎。一曰、取也」とある𠄎と同形になる。しかし、「取」の異構ではないだろう。

卜文によると、これら^𠄎と^𠄎字はともに王が衆・衆人に命じて行わせる行爲を表す字であることに共通點を持っている。よって、^𠄎・^𠄎は別々の字ではなく、同じ字の異形であることは間違いない。兩字のうち^𠄎が標準體で、^𠄎はその異體であると思う。《合集》六の用例がその證である。《合集》六ではこの字に續いて^𠄎方での^𠄎 田のことに言及している。だから、この字は田作と關係がある字と考えられる。したがって彭・于兩説のように右旁を聿(筆)に従うとするのは理に合わない。右旁は𠄎(植物)を又(手)に持つ形(𠄎)とみなし、上述のように^𠄎を標準形と考えるべきである。

^𠄎の右旁の「𠄎」が植物或いはその苗を土に植える動作を表現しているとするれば、この右旁「𠄎」は帆・机・玕など「藝」の原初形と一系の字であるとみなすことができる。左旁については耳説と斧説が

あるが、斧をこのような形で書いたものは見たことがないので、字形的には耳説が正しいと思う。

春秋晩期の曾仲遠臚鎮墓獸座（《新收》五二一）をはじめとして、金文には祖禰を「且規」と書く例は多い。また祖禰の禰を『尚書』舜典の「格于祖藝」には藝と書いている。禰は爾聲の字であるが、その爾は、『毛詩』魯頌・閟宮「六轡耳耳」の耳耳について馬瑞辰傳箋通釋が「耳耳、即爾爾之假借」と云っているように耳と通假する。このように藝と禰は通假し、耳と禰の聲符の爾も通假しているので、の右傍の「𠂔」（藝）と左傍の耳も通假する字であったに違いない。恐らく「𠂔」が字の初文で、左傍の耳はその聲符として後に附いたものだろう。象形字や會意字に聲符・意符を加えて新しい形聲字を作り、字音・字義を鮮明にするのは卜文・金文にはよく見られることである。

上述により・は兩字とも「聵」と隸定する。この隸定は『殷墟甲骨刻辭類纂』や『小屯南地甲骨 釋文』の隸定と同じである。しかし、「聵」は「从𠂔耳聲」で、藝の異體字の一つと解する點に大きな違いがある。この聵は字義も藝と共通する字義を有していたはずで、上文の卜文の場合は種・殖などを意味していると思う。

甲骨・金文略稱

- 《合集》 郭沫若等編『甲骨文合集』（中華書局、一九八二年）
- 《屯南》 中國社會科學院考古研究所編『小屯南地甲骨』（中華書局、一九八三年）
- 《新收》 鍾柏生・陳昭容・黃銘崇・袁國華編『新收殷周青銅器銘文暨器影彙編』（藝文印書館、二〇〇六年）

- (1) 拙著「衆人新解」(『立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所紀要』第六號、二〇一二年) 一—一四頁
- (2) 彭邦炯釋卜辭『衆人聲……』及相關問題(『殷都學刊』一九八九年第二期) 一—一四頁
- (3) 于省吾主編『甲骨文詁林』（中華書局、一九九六年）六五五頁
- (4) 中國社會科學院考古研究所『小屯南地甲骨 釋文』（中華書局、一九八三年）、一—三九頁